



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

第4カ月目



「あなたの顔は、あなたの両親や祖父母に似ていながら、しかし独特の表情を見せるようになりました。頭には細い毛が生え始め、まゆ毛やまつ毛も現れて、あなた独自の美しさをより一層高めます。あなたがうごめいたり震えたりする拍子に、手が口を探り当て、初めて指をしゃぶることになるという可能性もあります。あなたはほとんど成長して、誕生時の半分の身長にまでなりました。」

には、赤ん坊は誕生時の身長の1/2の16cmに伸び、体重も100g以上となっているでしょう。このようにサイズが激しく大きくなったことにより、普通母親はお腹が出始め、おそらく初めて自分の内部に生命が活動しているのを感じるはずですが、赤ん坊は寝ようとする時、心地よい位置を探すようになります。母親が食べる食物の栄養は消化され、1/2時間の内に成長途中のお腹のすいた子供に渡されます。

骨髄も形成されつつあり、それまでは肝臓や脾臓によって作られていた赤

血球を、生み出したり、補充したりし始めます。今や心臓ははつきりと聞こえ、日に275mlもの血をくみ出します。胎盤は既に直径14cm、重さ200gになり、莫大な量の栄養を効率よく送り出します。へその結は、工学的に奇跡ともいえるのですが、ちょうど水の一杯に入った園芸用ホースと同様に、決してもつれません。そしてそれは1日に30lの液体を時速6.4kmで運び、30秒間で液を1循環させることができます。



出生前の命

【ニューヨークのある医師によるこの話について考えてみて下さい】

「11年前に子宮外妊娠で卵管が破裂したある患者（妊娠2カ月）に麻酔を与えていた私は、かつてだけも見たことのないような小さな生きた人間を手渡されたのです。羊膜はもとのままで、透き通っていました。その中で羊膜の壁とへその緒でつながった小さな男性の人間が、羊水の中を力一杯泳いでいました。この小さな人間は完全に発達していて、細長い手の指と足、そして足の指もありません。皮膚は透明に近く、か細い動脈と静脈は指の先まではつきりと見えました。」

赤ちゃん是非常に元気がよく、約1秒に1回自然

す。」

(J・C・

ウイルケ博士夫妻著

「中絶についてのハンドブック」より、ポール・ロツクウェル医学博士の言葉を引用したもの)

なフォームで手をかきながら、羊膜の中を泳いでいました。この小さな人間は、いままで私がみたことのある「胎児」の写真や絵や模型のようでは全くありませんでしたし、それ以来数回に及んで実際にみる機会があった胎児とも違つて見えました。もちろんそれはこの胎児が生きていたからです！(この小さな人間は6-8週間目です。)

羊膜が開かれると、この小さな人間はすぐに命を失つてしまい、通常この時期の胎児の様子として信じられている状態(手足がだらんとしていることなど)変わりました。

もし政治家や一般市民の皆さんが、この時期にこれほど生き生きとした命が存在するのだ、ということに気付いたならば、おそらく中絶が少なくとも安楽死以上の反対を受けるのではないかと思うので

忘れられた

父親たち

「男性と中絶」

これまで広範囲にわたる研究は中絶と女性に焦点を絞ってきており、男性は法的にも、心理学的にも、医学的にも無視されてきました。男性にとって中絶とは、苦しい矛盾を含んだ問題なのです。男女の役割分担が変化し男性がより深く育児に関わるこの時代に、彼らは自分の胎児の生死を決する権利を組織的に否定されているのです。

この無力感や男性の自己像を傷つけるだけでなく、役割分担上のいさかみや過度の罪悪感、憂うつ、そしてしばしば破局をパートナーとの間に引き起こします。中絶は、性的関係を持つ両者に対しほ

とんど心理的な影響を与えない単なる女性の外科処置にすぎないと唱えられてきました。実際、女性と同様ほとんどの男性が、中絶により否定的な感情にとらわれることはないとしています。

しかし、その否定的な感情を拒否するよりもむしろ受け入れることを選んだ男性は、しばしば中絶の体験を当惑と苦痛に満ちた、自分の対処能力を超えたものである、と語っています。

空虚感

社会学者のアーサー・

ショーブスタックによると、

調査の結果4人中3人の男性回答者が中絶の体験に苦しんだと答えており、かなり多人数の少数派が日夜生まれてこなかった子供の夢をみ、また大きな罪悪感や自責の念、悲しみ

におそわれたと回答しています。

このような男女にとって、空虚感は生涯続くことでしょう。なぜならたとえ子供が死んでいても両親であることに変わりはないからです。感情の上での解決はほとんど不可能といえるでしょう。というのは、そこには目に見える結論は何一つなく、ただ思い出があるだけからです。生まれてこなかった子供は人間性を拒否されたのですから、墓も持ち得ません。悲しみが終わることはないのです。

目に見える結果もある

中絶の決定をめぐる根本的な不平等が両性の間にあるため、信頼やコミュニケーション、親密な関係、誠実さ、そして交際をする能力は非常に限られることにな

ります。またこの不平等により、男性の攻撃性が児童虐待や配偶者虐待、そして自己虐待に転向する可能性もあるのです。男性が、物事を決定する場から排斥されたり、だまされたり操られたりしていたと知った時、彼らは敵意を持つことが臨床の経験によって示されています。

男性も女性と同じく人間であり、不完全な存在です。彼らもショックや否定や怒りのような感情を経験するかもしれませんが、それは、単純な過程ではなく、率直でオープンで繊細な愛情に満ちたコミュニケーションを必要とする自然なものなのです。困難なこともかもしれませんが、しかし最終的にはコミュニケーションによって愛情と成熟と親密な関係がもたらされるのです。中絶を決定する時、男性の役割はえてして重要でなかつたり、受け身であつ

たりしがちです。パートナーや中絶手術をする医院からも無視されたりし、また手術そのものや術後において無力な存在であるかもしれない。この役割上の葛藤が、男性の性的機能不良の原因となつているとしても差しつかえありません。

不明瞭な男性の役割

最近の調査では、回答者の87%が理想的な男性は「自分の意見のために立ち上がるべきであると考えていることがわかつています。しかしながら中絶を決定する時、パートナーが法律により絶対的自治権を持つているため、男性のインプットは取るに足らないものとなつてしまつたのです。」

次に述べるのはある若い男性の体験です。「私ももっと自分が解放された

人間であると思つていました。ここに来て座つて、『これが避妊さ』と言ひ、それで全てがすむと。しかし今の私は身も心もぼろぼろです。こんな立場にいる私は誰も支えてやることのできないと思います。私自身混乱しているのです。彼らは彼女のために何をしてくれるのか、それが知りたい。私はどうなるのか。私が死ぬほど苦しんでいる時、彼らは助けしてくれるのだろうか。」

責任を持ち、愛する者達を守るという男性の役割においてほど、中絶の経験が苦痛に感じられることはありません。ある調査の結果、4人中3人の回答者が今でも、理想的な男性とは家族を守るために戦う男性であると信じていると示しています。けれども生死の決定に参与することを法的に認められていない場合、どうやって守れるというのでしょつ。

その一方で、責任を放棄することが中絶の考え方の主流にうまく調和しています。自分が妊娠させた女性のことを気にかけない男性にとつては、中絶は自分たちの性行為の証拠を消す格好の処理システムであり、全ての責任に対する断固たる放棄なのです。

父親となること

父親となることは、もちろん性交よりも妊娠よりもはるかに複雑なことです。その過程は子供の誕生によって実際に父となるよりもっと前から始まつているのです。それにはある種の能力、目的、態度、期待、役割、葛藤、そして防衛規制をもつことが含まれています。

女性と同様男性にとつても、中絶は不意にこの過程を阻み、混乱とあい

まいさ、罪悪感、そして敵意に満ちた空虚をもたらします。本当の意味では、中絶に関するあいまいな規制は改正され、見直されてきています。未来の母権を放棄する権利が保証されているというのに、未来の父権を主張する権利は保証されていません。もし女性が母となることを選んだとしたら、男性も父となることを義務づけられるのです。たとえ男性が反対しても女性は中絶を選ぶことができ、男性はその経済的な負担をになうのが普通です。

男性がパートナーに中絶を勧める時、それは強制、愛情のなさ、無神経さ、自己中心の象徴となりまふ。女性が中絶を選ぶ時、それは女性の権利の叫びであり、健康の権利と男性の抑圧からの自由に対する賛同であり、女性の身体と生殖機能においての自治権の確立となるのです。

罪悪感と悲しみに

対処するには

いったん中絶が行われると、男性もまた女性と同じくらい感情的な支えを必要とします。どちらにとっても子供を失うことは、他と比べようもないほど大きな喪失なのです。罪悪感と悲しみは執拗についてまわり、意志の力ではどうすることもできません。

罪悪感に対する最良の治療法の一つに、自己解放があります。過去の未完成の事柄について語ることで、罪悪感はぬぐい去られ、小さな奇跡を引き起こすことが知られています。罪悪感を解決するためのもう一つの方法として、未完成の感情的な事柄を入れておく巨大な貯蔵室がある。ただ単に認識する方法があります。この認

識そのものにより、人間は気持ちを保つ必要がなくなるので大変明るく晴れやかになるものです。そして彼は当座の苦しみを認識することもできるようになります。

感情そのものではなく、感情への抵抗が問題の大部分を占めていることが多いのです。感情が放たれ、深く感じることを許されれば、知識をもちまします。これらの感情を充分に表現するのはほんの数分かもしれませんが、そのことにより自由な自己受容のできる人間となるのです。

生まれてこなかった子供に対するあきらめは、究極的には許容の行為に関わりません。中絶に対する許容は、真実を知ろうとすること、真実を語ろうとすることから生まれます。成長することはすなわち、そのあやまちの程度や性質に関わらず自分を許すこと

なのです。

不幸なことに、人々はしばしば自分の感情をあるがままに受け入れる前に許そうとしてつまづきます。許すべきであるとか許さなければと考えたり、受け入れようとするのは、かえって妨げになります。このような男女にとって、空虚感を生涯続くことでしょう。なぜならたとえ子供が死んでいても両親であることに変わりはないからです。

忘れ去ることではない

しかし自分を受容することを、中絶を忘れることとは違います。子供は決して戻ってはこないのです。思い出は残るでしょうが、自分に対する否定的な気持ちはいやすことができます。

中絶とは男性にとって、研究者やカウンセラーや

女性が気付き始めた以上に大きなジレンマなのです。多くの男性が、女性と生まれてこない子供と共に中絶の被害者です。現在のところ彼らは沈黙している受難者であり、中絶に対する自分の反応にとまどい、落胆しています。時と共に両性の真の平等が、おそらくより民主的な決定と愛情をもちたらし、苦しみを減らし、中絶は何の解決にもならないという認識がおこることでしょう。



皆様、いかがお過ごしですか。本格的な雨の季節を迎えようとしています。

さて、この四月に開設いたしました事務所も二ヶ月が過ぎ、少しずつですが、活動内容を深めております。ですが、まだまだ出発したばかりで手探りの状態です。そんな中で皆様方からの反応は、私たちにとりまして、大きな喜びであり、励みです。現在の主な活動は、二ヶ月毎のニュースの発行、会員募集、翻訳、資料の制作、多方面へのP・R等です。

会員募集におきましては、少しずつですが、皆様方からのご協力も増え、スタッフ一同、大変喜んでおります。心から感謝申し上げます。

社会の中にプロ・ライフ・ムーブメント(小さな胎児を守る)が根付くためには、一人一人の方の関心と努力がとても大切です。会員募集は、一人一人の方

に、この運動に関心を持っていただくために、また、この運動を精神的、経済的にご支援していただきたく行なっております。皆様方のご援助は、ニュースの発行、資料の制作、通信費、事務所の設備、運営等に活用させていただいております。勉強会(ビデオやスライドの上映等も計画いたしました)も思っております。

重ねて、皆様方のご理解とご支援、ご協力をお願い申し上げます。

6月16日

プロ・ライフ・

ムーブメント

スタッフ代表

ノボトニー・ジェリー